

No. 55

2013. 8

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談
鹿島田真希（小説家）



宮沢賢治《日輪と山》水彩・鉛筆、紙 制作年不詳 「没後80年 宮沢賢治・詩と絵の宇宙—雨ニモマケズの心」出展作品（展示期間 8月3日～16日）
資料提供：林風舎

収蔵品のご紹介

恩地孝四郎『氷島』の著者（萩原朔太郎像）

2012年度世田谷文学館事業報告

館長の作家対談

ゲスト
鹿島田真希
(小説家)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

「冥土めぐり」で芥川賞を受賞された鹿島田真希氏をお招きし、大学時代に指導教授でもあった菅野館長がお話を伺いました。



『冥土めぐり』
2012年、河出書房新社

「苦節14年」での芥川賞受賞

館長▼白百合女子大学を出てから、何年になりましたか？

鹿島田▼13年ぐらいです。2000年ちようどでした。

館長▼僕もその年に教職を辞めましたから、その頃の記憶はしっかりしています。「文藝」新人賞を取られたとき、あなたは大学3年生で、それから約1年後に卒業ということになりますね？ その

時期はやっぱり大変だったでしょう。

鹿島田▼そうですね。受賞後の次の作品を書いてという編集者の要求がありましたから。卒業論文は菅野先生に見ていただきましたが、論文と受賞後第1作と、物理的に時間がなかったです。

館長▼芥川賞受賞の記者会見で、「苦節14年」つてね、ずいぶん古めかしいことを言われたけれど、普通の場合の意味での「苦節」とは違って、一つ一つの作品に14年間全力投球してきたんだという意味合いで、僕は受け取りました。

鹿島田▼そうですか、ありがとうございます。その間に三島由紀夫賞や野間文芸新人賞をいただいたので、自分も満更ではないんだと自分を時々励ましていました。やはり全力投球はしていたと



『ナンバーワン・コンストラクション』
2006年、新潮社



思います。その時期によって現代思想的になったり、物語寄りになったりしていました。『ナンバーワン・コンストラクション』のように現代思想を読んで咀嚼して物語を作っていくのは、時間がかかりました。

館長▼なるほど。系列が違ったりすると、作り方、書き方を変えなきゃいけないから。感心するのは、1作ごとに作り方が変わって、舞台という言い方は古いかもしれませんが、いろいろと作品ごとの環境を変えて、工夫しておられることが良く解ります。例えば『女の庭』は団地かマンションのような集合住宅が舞台で、『六〇〇〇度の愛』では長崎へ出かける。それから僕が一番感心して読ませていただいた『ゼロの王国』は、人間関係が他の作品とずいぶん違うような設定になっていますね。そうして一つ一つ構想を変えて、それにふさわしい書き方になっているのは大変だっただろうと思います。

鹿島田▼昔、私は音楽学を志していて、楽理科を受験するために「内容と形式の一致」ということをかなり勉強しました。それで、やはり内容が変わると形式も変えなければいけないということ

み違いをしていたかもしれないけど。

鹿島田▼いやまさに、その通りです。ドストエフスキーが好きだったので、書くとしたらやはり「聖なる愚か者」の話を学校という世界にたとえて書いてみよう。現代社会にあるとしたらどんな感じだろうと表現しました。

館長▼これまで書いてこられて、ご本人で一番手応えがあった作品は何ですか？

鹿島田▼やはり、『六〇〇〇度の愛』と『ゼロの王国』が転機かなと思います。『六〇〇〇度の愛』の場合はマルグリット・デュラスの影響を色濃く受けていて、『ゼロの王国』はドストエフスキーの『白痴』へのオマージュのような感じです。

女性作家からみたドストエフスキー

鹿島田▼女性作家のドストエフスキーの解釈は独特だと思いますし、恋愛的にロマンティックに読んでみたりすることもできます。ドストエフスキーの作品もその当時は三面記事みたいに掲載されて主婦なんかを読んでいたし、実際、女性が読んでも面白いものです。私は、男性が上手く

をすごく意識します。

小説家への歩み―信仰とドストエフスキー

館長▼あなたは小説を書くこうと思ったのはいつ頃からですか？

鹿島田▼大学2年の時、友達とニス・ヘヴァカンスに行っただんです。友人と3人でアパートを借りて、3週間ぐらい過ごしているうちに飽きてきて、余興に小説みたいなものを書いて見せたら、面白いと言ってくれました。それで、その気になって文芸雑誌を読み出し、新人賞の応募規定を見て、その枚数を書いて初めて送った「二匹」が受賞作になりました。

館長▼全くの処女作ですか。それ以前に書いたことはなかった？

鹿島田▼それまでは、本当に落書きみたいなもので。作家になるつもりとかで書くわけではなく、日記と妄想の間みたいなものを書いていました。館長▼それと、立入ったことなので自由に答えていただきたいんですけど、信仰に入られたのはいつですか？

「せきん 藉身」を書いていないと思います。「藉身」というのはですね、キリストは靈魂であるが同時に肉であるんです。女性はそこをすごく官能的に書けます。倉橋由美子さんもそうですね、少し不謹慎なくらい官能的に挑発的に書きます。例えば、キリストが復活した時にトマスが信じられないと言ってキリストの傷口の中に指を入れる「聖トマスの不信」という絵があります。極めて聖なる素晴らしい絵とも見られることができますが、ちよつと官能的な絵とも見られるわけです。女性作家として、その両側を書きたい気持ちがあります。書かなきゃいけないと思います。

館長▼日本のドストエフスキーの受容では、その面が欠落していると考えるわけですね。

鹿島田▼昔から、特に男性たちが見たくない部分だったのではないかと思います。

館長▼見たくないのか、あるいは理解できないのかもしれない。それから、日本での重要な問題点で、正教会のこともきちんと解っていないとドストエフスキーを理解できない部分であるでしょう？

鹿島田▼ありますね。ドストエフスキーの女性の書き方は独特ですけど、官能性、エロスの問題について言うと、例えば謙遜に取り憑かれた女性が出てきて、好きな男性に向かって「私もう、あなたに振られたい気分だわ」と、それがエクスタシーの頂点に達したかのように叫び声を上げる。『カラマーゾフの兄弟』では、アリョーシャに愛を訴えたリーザが、アリョーシャに「イワンにラブレターを渡してくれ」と言ったりする。そういうのは、女性の目線からすると面白いです。

館長▼なるほど。日本のドストエフスキー研究家や影響を受けた作家でも、その辺りのことは書いていないかもしれない。とにかく、みんな重苦しい大審問官のところを熱中して論じがちだった

鹿島田真希 (かしまだ・まき)

1976年、東京都生まれ。高校生の頃にドストエフスキーの作品に心打たれ、ドストエフスキーと同じ正教会に通い、17歳の時に日本ハリストス正教会で洗礼を受けて信徒となる。白百合女子大学フランス文学科在学中の1998年に応募した「二匹」で第35回文藝賞を受賞し、小説家デビューを果たす。大学の卒業論文でジュリア・クリステヴァをとりあげ、その指導教授が菅野昭正。2004年、『白バラ四姉妹殺人事件』が三島由紀夫賞候補となり、翌2005年『六〇〇〇度の愛』で同賞を受賞。また、2007年『ピカルディーの三度』で野間文芸新人賞を受賞。2006年の『ナンバーワン・コンストラクション』以来数度にわたって芥川賞候補となり、2012年、『冥土めぐり』で147回芥川賞受賞を果たした。



『ゼロの王国』
2009年、講談社



『六〇〇〇度の愛』
2005年、新潮社

りするし、愛の問題も抽象的に考えたり観念的に考えたりというのが日本のドストエフスキー受容の歴史だったと思うんです。どうし

てもドストエフスキーというと、重厚な思想を背負って苦しんで書いた作家と考えがちで、今でもそうかもしれない。でも、鹿島田さんの強みは、やはり何と言っても正教会の信徒だということ。文学と正教会、その両面から読んでいる。今言われたような女性の書き方でも、簡単にいうとフランス女性の書き方と全然違うわけですね。僕もその差を考えるくらいのことではできませんが、ではなぜドストエフスキーの女性はこの造形なのかは解らない。その辺りを小説に昇華させ、ドストエフスキー論も書いていただいたりすると、ドストエフスキー評価も随分違ってくると思います。

鹿島田▼卒論で扱ったクリス・テヴァの『黒い太陽―抑鬱とメランコリー』というのがドストエフスキーとデュラスを両方論じた中々面白い本で、それが私のドストエフスキーとロマンを結ぶ一つのきっかけなんです。ある一つのメランコリーがあり、これに引き裂かれた女たちの恍惚を、デュラスの場合には非常に推敲された短い言葉で書いている。他方、ドストエフスキーの場合には

書くこと自体が文学だと考えているんでしょ。初期の頃はロマンと呼んで、いろいろな枝葉をつけていたんですが、だんだん枝葉を切ってしまう。あなたはそうならないようにしてください、小説が枯れちゃいますから。鹿島田▼でも『期待 忘却』などは、まだ読んでいて想像が広がる感じします。館長▼断片を重ねて書いているから、その断片をつなげて考えていく作業は読者がやる。何を考えさせるかという結局は男と女のコミュニケーションですね。深い意味での、魂のコミュニケーションが成り立つのか成り立たないのかということ、読者が考えられるように断片を並べている。とても難しいし、読解するのはめんどくさい。鹿島田▼めんどくさいですね。そのへんはブランショの問題であるような気がしますね。自分が読者を拒んでいるのか、それとも読者に伝えたいのか。でも例えば、自分は女であるし、女が男を思う気持ちはわかりますけれども、それが返ってくる時に男が女を思うときというのは想像の範疇を超えてしまっています。神と人間にもたえられます。館長▼ブランショは、より根本的な問題があるんじゃないかと断片で書いているんじゃないかと思うんです。ただ、そうすると小説は芳醇でなくなる。お酒にすればコクがない。だから、適度にどこでどういうふうに生きているかとか、家族関係とか、みんな社会生活をしているわけですから、具体的で小説の養分になるようなものは手放さない方がいいんじゃないかという気がします。鹿島田▼私の作品の中に『白バラ四姉妹殺人事件』があります。あれは、やっぱり枝葉は切り落とした感じですよ。題名も良いし。そういえば、話ごとびとびになります。鹿島田さんは



起承転結があるけれど、殴り書きのように無駄な部分が多い。それでもメランコリーと恍惚のところで一つの共通点を持つていると、私はそういうふうに思います。館長▼ただ、デュラスはフランス作家で、どうしてもフランス作家って物事を明晰にしすぎちゃうところがある。ドストエフスキーは色々な奥深い、襲みたいなのをもっていて、混沌とした世界と言えは混沌とした世界で、我々にはうまく整理できないじゃないですか。それがフランスの作家だと、すいすいって非常に合理的、論理的になってしまふ。やっぱりデカルトの国なんだなあ。鹿島田▼そうですね。館長▼それはフランス小説の一つの特性でもあるわけでしょうけど。フランス人のドストエフスキー論つてのは、そこが駄目なんだとも言えるんじゃないかと思えますね。ところで、あなたが読んでいるとおっしゃったフランス作家のモーリス・ブランショは、存在の究極のものを探究していく精神の運動に徹した作家ですね。彼が探求するのは精神の到達すべき理想の地帯、それは不在かもしれないけれど、探求に値する存在でもあるという考え方ですね。鹿島田▼はい、そうですね。

館長▼抽象的というか内的にというか、根源的にはそれが存在するという仮定に立つて、それを

題名のつけ方が上手ですね。初め、「二匹」って何だ、これは変な題だと思いましたが、読んでみたらピタリとききました。『レギオンの花嫁』とか『ゼロの王国』も、とても良い題です。レギオンって、ロマン派の頃にフランスで流行ったんですね。あなたも引いた聖書の言葉からで、ロマン派の作家は芸術家気取りで俗世間から離れて象牙の塔に籠ると称していた。そして彼らは、俗世のブルジョワ連中はただ多数というだけで威張っているんだと、レギオンと呼んで軽蔑してたんですね。鹿島田▼多数派というのは、悪魔っていう意味がありますね。館長▼もちろん悪魔という意味合いも兼ねて、芸術を理解しない悪魔たちですね。鹿島田▼『レギオンの花嫁』は、自分ではレギオンという悪魔なものと、神にとつて花嫁の教会という、何か矛盾した感じにタイトルを付けてみたんです。それから、題名には数字が結構入っています。館長▼そして、あなたの小説には食べ物のことがよく出てきますね。人物が何を食べているか、何を好き好んで食べようとするかで、あるイメージが作れますよね。あまり意識したことないですか？

鹿島田▼食べ物さえ具体的に書けば、上手にいく時が多いんです。例えば、食べ物のことを描写すれば、価値観や、その背景にある食文化とか地理的なものも判ります。館長▼食べ物美味しそうに書くのは難しいことでしょうが、鹿島田さんには美味しそうとか不味そうとか、そういうことはあまり関係ないですか？

鹿島田▼その作品の必然性に合わせて、美味しうかどうか書くべきかどうかを考えますけど、関係ないときは関係なく書きます。題名のつけ方が上手ですね。初め、「二匹」って何だ、これは変な題だと思いましたが、読んでみたらピタリとききました。『レギオンの花嫁』とか『ゼロの王国』も、とても良い題です。レギオンって、ロマン派の頃にフランスで流行ったんですね。あなたも引いた聖書の言葉からで、ロマン派の作家は芸術家気取りで俗世間から離れて象牙の塔に籠ると称していた。そして彼らは、俗世のブルジョワ連中はただ多数というだけで威張っているんだと、レギオンと呼んで軽蔑してたんですね。鹿島田▼多数派というのは、悪魔っていう意味がありますね。館長▼もちろん悪魔という意味合いも兼ねて、芸術を理解しない悪魔たちですね。鹿島田▼『レギオンの花嫁』は、自分ではレギオンという悪魔なものと、神にとつて花嫁の教会という、何か矛盾した感じにタイトルを付けてみたんです。それから、題名には数字が結構入っています。館長▼そして、あなたの小説には食べ物のことがよく出てきますね。人物が何を食べているか、何を好き好んで食べようとするかで、あるイメージが作れますよね。あまり意識したことないですか？

鹿島田▼食べ物さえ具体的に書けば、上手にいく時が多いんです。例えば、食べ物のことを描写すれば、価値観や、その背景にある食文化とか地理的なものも判ります。館長▼食べ物美味しそうに書くのは難しいことでしょうが、鹿島田さんには美味しそうとか不味そうとか、そういうことはあまり関係ないですか？

鹿島田▼その作品の必然性に合わせて、美味しうかどうか書くべきかどうかを考えますけど、関係ないときは関係なく書きます。題名のつけ方が上手ですね。初め、「二匹」って何だ、これは変な題だと思いましたが、読んでみたらピタリとききました。『レギオンの花嫁』とか『ゼロの王国』も、とても良い題です。レギオンって、ロマン派の頃にフランスで流行ったんですね。あなたも引いた聖書の言葉からで、ロマン派の作家は芸術家気取りで俗世間から離れて象牙の塔に籠ると称していた。そして彼らは、俗世のブルジョワ連中はただ多数というだけで威張っているんだと、レギオンと呼んで軽蔑してたんですね。鹿島田▼多数派というのは、悪魔っていう意味がありますね。館長▼もちろん悪魔という意味合いも兼ねて、芸術を理解しない悪魔たちですね。鹿島田▼『レギオンの花嫁』は、自分ではレギオンという悪魔なものと、神にとつて花嫁の教会という、何か矛盾した感じにタイトルを付けてみたんです。それから、題名には数字が結構入っています。館長▼そして、あなたの小説には食べ物のことがよく出てきますね。人物が何を食べているか、何を好き好んで食べようとするかで、あるイメージが作れますよね。あまり意識したことないですか？

連続講座講演録刊行のお知らせ
菅野昭正編『ことばの魔術師 井上ひさし』

世田谷文学館では2010年より、当館館長の菅野昭正の企画・構成による連続講座を行っています。本講座は、日本文学と文化に大きな業績を残し、影響を与える作家を一人取り上げ、ゆかりの深い方々と各分野の研究者により多方面から読み解くものです。

2010年「知の巨匠 加藤周一」、11年「村上春樹の読みかた」、昨年の「ことばの魔術師 井上ひさし」、そして今年の「書物の達人 丸谷才一」(6月22日・7月6日、全5回)のいずれも、各講師と参加者双方の熱意あふれる充実した催しになりました。

この連続講座は終了後に講演録が刊行され、講座に参加いただけなかった方でも本を通じて第一線で活躍中の各講師の見解、考察を辿っていただけます。昨年の講演録も、本年4月に刊行されました。今年度連続講座の講演録は来年の刊行を予定しています。



『ことばの魔術師 井上ひさし』
菅野昭正編著、阿刀田高、横山眞理子、小田島雄志、鶴山仁、小森陽一、ロジャー・バルバース著、2013年、岩波書店

資料受贈報告

2013年2月11日～6月20日

▼石井耕様・石井牧様・平賀美穂様・石井樹様より石井立旧蔵家原稿・書簡など、石橋安見様より山本健吉自作句色紙、伊藤良子様より寺山修司署名入り初版本『はだしの恋』、岩間穂子様・日本放送作家協会から岩間芳樹原稿一括、日本シナリオ作家協会より下飯坂菊馬旧蔵台本一括、宮澤壯佳様より寺山修司原稿「フランク・ザッパ」詩集「地下演劇」誌のための紹介翻訳」など

▼青柳志解樹様・新井啓子様・江藤茂博様・榎本綾子様・大場やす子様・岡野薫子様・刈田敏夫様・川越厚子様・小菅麻起子様・酒井龍一様・清水義和様・高橋修一様・野村喜和夫様・羽切美代子様・浜田知明様・日高のぼる様・福嶋朝治様・福島久男様・松井国央様・峰岸了子様・山口直孝様・山本幸久様

▼青山学院大学経済研究所 跡見学園女子大学花咲記念資料館 泉鏡花記念館 市川手見宗文学賞実行委員会 井上靖記念文化財団 うらわ美術館 樫出版社 江東区砂町文化センター 戎光祥出版 絵本学会 大分県立先哲史料館 大同信ことば館 大阪大学近代文学研究会 大原富枝研究会 学習院大学史料館 金沢文化振興財団 鎌倉市鎌木清方記念美術館 鎌倉文学館 川崎市民民ミーツーム 木城えほんの郷 北九州市立文学館 北九州市立松本清張記念館 北九州森鷗外記念会 京都芸芸織維大学美術工芸資料館 黒澤明研究会 群馬県立土屋文明記念文学館 國學院大学博物館学研究室 越谷市図書館 野口富士男文学館 湖北社 白百合女子大学言語・文学研究センター 世田谷区教育委員会 世田谷区立郷土資料館 全国文学館協議会 大東学園 台東区立中央図書館 タイムドーム 明石 たましん地域文化財団 短歌研究社 沖積会 東京都教育庁地域教育支援部管理課 東京都現代美術館 徳島県立文学書道館 なかよし図工室 新美南吉記念館 日本近代文学館 日本現代詩歌文学館 日本書房 日本トルストイ協会 練馬区文化振興協会 姫路文学館 ふくやま文学館 文学の森 平凡社 北海道立文学館 町田市民文学館 松山市立子規記念博物館 水と緑と詩のまち前橋文学館 三島市郷土資料館 未知谷 椋鳩十文学記念館 結城市教育委員会 ゆうき図書館 横光利文学館 四日市市立博物館 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター 論壇社

▼「あけび」「新しき村」「宇宙風」「海」「海紅」「がいつ亭」「風花」「カプリチオ」「寒雷」「橄欖」「くさくさ」「九品仏川柳会」「鴻」「かの花」「午前」「山河」「山響」「春耕」「春燈」「抒情文芸」「新現代詩」「青衣」「青灯」「川柳研究」「双鷲」「タクラカン」「蠶」「玉川台つれづれ」「短歌人」「丹青」「地中海」「白」「プチ★モンド」「麓」「文藝軌道」「文藝飯能」「窓」ゆく春「ランブル」りんごの木」檸檬」の各誌はかより資料の寄贈、ご協力いただきました。ありがとうございました。(五十音順団体名敬称略)

当館収蔵品の紹介 48

恩地孝四郎

『水島』の著者（萩原朔太郎像）

詩人の顔

『水島の著者』は、初期の月夜のようなセンチマン陶醉を捨てて、非定と肯定の争闘、絶対と憧憬の格闘とに、蒼浪として人生の巷を歩む彼の悲壮な晩年をかきたく思つたもので、彼の逝いた年の春に国展出品として作つたもの。自分として意に満たぬもの多分であるが、私の敬し、愛し、又ひそかに追撃した私の数少い友人の一人への追慕をいくぶんかでも満たし得た点で、私としては捨てきれない作品である。

（『水島』の著者、「美之国」復刊2巻3号、1948年3月）

これは、『月に吠える』の挿画、装幀、また詩誌『感情』の活動を通じて近代日本詩を切り拓いた詩人・萩原朔太郎（1886～1942）と長い交流があり、自身も新しい美術としての創作版画を牽引した版画家・恩地孝四郎（1891～1955）が、自作『水島』の著者（萩原朔太郎像）について書いた文章です。別のところでは、「遺族の方々に余り賛成されなかつた。近親の人には、あのもつと明るい、無邪気な印銘を消したくないからであらう」（朔太郎残影）、「現代日本文学全集月報15」、筑摩書房、1954年）と記し、また恩地自身も朔太郎は会えばいつも「人なつこい笑顔」を向けたと回想していることから、敢えて友人として想い出すのとは異なる表情を選んだことは明らかでした。恩地はこの作品に、朔太郎が怒り



恩地孝四郎『水島』の著者（萩原朔太郎像）
1943年、* 紙・木版、56.5×45.0cm

や虚無、喪失感に苛まれながら詩作と格闘して書き上げた晩年の詩集名を冠して『水島』の著者』と題し、特徴ある目鼻立ちの顔貌に夥しい皺を刻み、深い懊悩の表情で描くなど、近しい人や友だけが知る素顔の朔太郎ではなく、「詩人」萩原朔太郎の姿を表現したのです。

今回は、恩地が朔太郎について書いた言葉を引きながら、この作品をご紹介します。

書くものが容貌に現われるほど純粹な詩人

抽象絵画の先駆者で造形性の強い作風で知られる恩地の版画の中でひとときわ写実的なこの作

界をリードした立場であつたことや、安井曾太郎がこの頃制作した肖像木版画の影響などを踏まえて多角的な検討を行っています。他の写実的な肖像版画のモデルも、作曲家の山田耕筰、詩歌人の北原白秋、バイオリニストの諏訪根自子、浮世絵研究者の藤懸静也など多くは朔太郎同様、恩地と交流があつた人物です。ただ注目されるのは、彼らを描いた作品は背景に抽象的な形の色面やモデルを象徴する事物を配した恩地得意の構成的でモダンな構図なのに対して朔太郎像は背景はグレー一色で、往年のモダンズム詩人の変遷、晩年の苦しい心情や逼塞する戦時下の状況をこの色で表したのかもしれない。

「萩原イズムからの脱却に「苦勞させられた程の心酔」「顔」「四季」1943年9月号・萩原朔太郎追悼号）をした恩地は、朔太郎が晩年になって泥酔する様を何度も見かけて「老ひて酔ひて夜の地下道をゆく彼は、やはり晩年の書きものに現はれてゐる」（同前）と案じ、「彼ほどむき出しに、かくものが容に現はれてゐる人を私はみない。……彼の詩作と論策は併し日本文学にとつて貴重視すべきものだ。あの純粹さと真正直さ。そして、それを守る勇敢さ。彼の顔をみてゐると、しみ

じみとそれを感じる」と書いています。これを読むと、詩の世界と格闘し続けた朔太郎をグレーの背景の中に浮かび上がらせた恩地の真意が汲み取れます。詩人朔太郎を表現できるのは朔太郎自身の顔容で、補うための背景装飾や道具立てなど必要ないということでしょう。

深い皺と清んだ眼の印象を刻む
版画というと同じ作品が大量に流布していると思われがちですが、恩地が追求した自画自刻自摺の創作版画の場合は数点しか作られないことも多く、8枚の版木を10度摺りするというこの作品も、制作当時の恩地本人摺りバージョンはたった2点だけと推定されています。恩地版画は終戦後に来日したアメリカ人コレクターに高く評価され、中でも評判となつたこの作品はコレクターたちの懇願で更に6部作成されますが、それでも注文を捌ききれず新作に取り掛かる支障となるため、代りに弟子の関野準一郎に20部摺ってもらいます。しかしこれらも多くが国外に渡り、国内には殆ど残っていませんでした。そこで恩地の没後、この作品を日本人が手にして観られるようにと、遺族が浮世絵摺師の平井孝一に摺りを依頼しました。当館所蔵作品はこの平井摺りで、恩地本人による意識的に滲みや量かしを多用した摺りが生み出す濃い詩情の代わりに朔太郎の顔面の皺や蓬髪を執拗に刻み込んだ恩地の彫りが精確に摺り重ねられ、別の見所がある版画作品となつています。平井摺りをじっくり観ると、恩地が朔太郎に初めて会つた際の印象を綴つた文章、「きやしやな顔つくりのなかに刻まれたその深い皺と、彼の心の苦悩をよく現はして寂しい氣持をさせられた。……そのきつぱりとした眼はそして、清く純んでゐた。彼のものがどんな苦しさや、陰氣さを示してゐてもしかもなほ清いものを感じさせたそれである（同前）そのままに、皺や清んだ眼の表情が描かれているとわかります。自身も生涯純粹に創作版画に取り組んだ恩地孝四郎が心血を注いで刻んだ畏友の容は、詩人の精神とその歩みをも表現した肖像版画の名作として日本近代木版画史に位置づけられています。（本作品は、2013年10月5日から12月15日まで1階展示室までご覧いただけます）
* 近年、朔太郎生前に制作された可能性もあると指摘されている。

企画展

「没後80年 宮沢賢治・詩と絵の宇宙―雨ニモマケズの心」

2013年7月13日(土)～9月16日(月・祝) 2階展示室 *観覧料は、12頁をご覧ください。

宮沢賢治（1896～1933）は、『銀河鉄道の夜』『風の又三郎』『注文の多い料理店』などの童話や『永訣の朝』『雨ニモマケズ』などの詩作で広く親しまれてきましたが、東日本大震災以降、再びその作品が注目を集めています。

賢治が生きていたころ、岩手では2度の三陸地震と凶作に見舞われました。そんな苦しい時代のなかで、賢治は岩手県を架空の「イーハトーブ」と名付け、そこに理想郷を築こうとしました。また、幻想的な童話は、視覚的なイメージを喚起する表現に富み、多くの画家や絵本作家がその刺激を受け、すぐれた挿絵や絵本作品を生みだしてきました。

本展では、賢治自身の「雨ニモマケズ手帳」や水彩画などの直筆資料のほか、賢治の童話を題材とした絵本の原画や挿絵約200点を展覧いたします。

震災の苦難から立ち直ろうとする日本人にとって、賢治の「雨ニモマケズの心」が未来を照らす糧となることを願って開催します。

「幸田文展」―会つてみたかった。

2013年10月5日(土)～12月8日(日) 2階展示室 *観覧料は、12頁をご覧ください。

父・幸田露伴の想い出を綴り40代でデビューした幸田文（1904～1990）は、『流れる』『おとうと』がベストセラーとなり、50代半ばに早くも『幸田文全集』が編まれるなど一躍流行作家となりました。

しかしその後、幸田文は精力的に執筆活動が続けながらも、ほとんど自作を本にまとめていません。60歳を過ぎて、奈良斑鳩の法輪寺三重塔再建のために奔走し、さらに70歳を超えて全国の樹木や地崩れの現場を訪ね歩きました。『木』や『崩れ』などの晩年の文章が刊行されて読者を驚かせるのは彼女が86歳で没した後のことでした。



1938年5月、右より父・露伴、文、娘・玉 撮影：小林勇

幸田文は後半生の行動のきつかけを「種が芽を吹いた」と表現しています。「心の中は知る知らぬの種が一杯に満ちている、と私は思う。何の種がいつ芽になるか、どう育つかの筋道は知らないが、ものの種が芽に起き上がる時の力は、土を押し破るほど強い」（『崩れ』）。

死の床を迎えた肉親を看取ること、「みそっかす」であつた不遇な自分の内面を見つめることから出発した幸田文は、やがて胸の中の「たね」をひとつひとつ取り出し、執筆の幅を広げてゆきます。日々の暮らしや人事にとどまらず、草木や動物、揺れ動く大地にいたるまで、心を寄せた対象に身体ごとぶつかり、命あるもの全てがかかえる哀しみと強さを描き出す、特異な文学の境地を切り拓きました。



幸田文『おとうと』
1957年、中央公論社

幸田文『きもの』
1993年、新潮社

「展覧会の見どころ」

賢治が「雨ニモマケズ」を記した手帳や賢治自身による水彩画のほか、賢治童話を題材とした44人の作家による絵本原画、挿絵原画約200点で構成した大規模な企画展です。

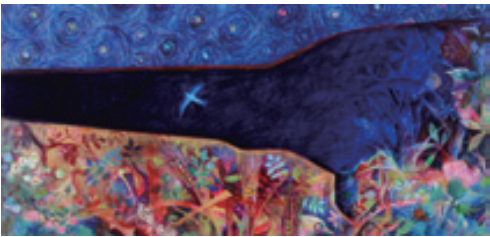
*資料保護のため、自筆資料、絵画は、会期中一部展示替えを行います。「雨ニモマケズ」手帳は7月26日まで、賢治自作水彩画は8月3日～16日までの展示となります。
*関連イベントとして、「賢治童話を描く絵本作家によるトーク&サイン会」などを開催します（詳細はお問合わせ下さい）。



茂田井武『セロひきのゴージュ』
1956年、福音館書店



堀内誠一『雪わたり』1969年、福音館書店



伊勢英子『よだかの星』1986年、講談社



東逸子『銀河鉄道の夜』1993年、くもん出版

2012年度事業一覧

1. 展覧会		
展覧会名	会期	日数 一般観覧料(円) 観覧者数(人)
コレクション展	前期「文学に描かれた世田谷 下北沢・三軒茶屋界隈」	4/21～9/23 156日
	後期「文学に描かれた世田谷 世田谷の詩歌と山本健吉」	10/6～4/7 184日 200円 19,118
企画展	「都市から郊外へー1930年代の東京(前年度から継続)」	4/1～4/8 8日 700円 1,932
	「地上最大の手塚治虫」展	4/28～7/1 65日 800円 16,749
	「宮崎駿が選んだ50冊の直筆推薦文展」	7/21～9/17 59日 500円 6,252
	「齋藤茂吉と『榆家の人びと』展」	10/6～12/2 58日 700円 7,330
	「第32回 世田谷の書展」	1/12～1/27 16日 無料 1,226
	「帰ってきた寺山修司」展	2/2～3/31 58日 700円 8,412
展覧会観覧者数合計		61,028
2-1. イベント:企画展関連		
開催日	内容	参加者数(人)
「地上最大の手塚治虫」展 関連イベント		
4/28、5/5、5/12、5/19、5/26、6/2、6/3、6/9、7/1	アニメ映画上映会 「鉄腕アトム」「W3」「ジャングル大帝」 「リボンの騎士」「どろろ」「ふしぎなメルモ」 「悟空の大冒険」「三つ目がとおる」 「100万年地球の旅 バンダーブック」 「ある街角の物語」展覧会の絵」 「森の伝説PART-1」「ぼくの孫悟空」	3,480
5/5、5/12、5/19、5/26、6/2、7/1	ワークショップ 「マンガ・アシスタント体験」 「ソーマロープ体験」	521
5/20	記念トーク「清水さんに聴け! 手塚治虫の現場」 出演:清水義裕(株式会社 手塚プロダクション 著作権事業局局長)	64
4/28～7/1	特別クイズ「キャラクターの名前を当てよう!」	1,092
「宮崎駿が選んだ50冊の直筆推薦文展」 関連イベント		
7/22	記念対談 出演:江國香織(作家)、金原端人(翻訳家・法政大学教授)	125
8/4	「おはなし会」 出演:おはなし泉	86
9/9、9/15	アニメ映画上映会 「注文の多い料理店」「セロひきのゴージュ」 「アルプスの少女ハイジ」「クマのプーさん」 「せむしのこうま」	630
「齋藤茂吉と『榆家の人びと』展」 関連イベント		
10/14	講演会「茂吉短歌の魅力」 講師:篠弘(歌人)	59
10/20	講演会「『榆家の人々』とドイツ教養小説」 講師:池内紀(ドイツ文学者・エッセイスト)	85
10/24	北杜夫追悼対談①「北杜夫との日々」 出演:斎藤由香(エッセイスト、北杜夫長女)、宮田穂栄(元編集者、エッセイスト)	201
10/27	北杜夫追悼対談②「どくとるマンボウ家のでんやわんや」 出演:磯崎憲一郎(小説家)、斎藤由香	154
11/23	朗読会「朗読でたのしむ齋藤家の人びと 茂吉、茂太、杜夫」 出演:声を楽しむ朗読会(代表:大谷紀幸) 解説:福島勝則(多摩美術大学教授)	154
11/24	ギャラリートーク「どくとるマンボウ昆虫展」 出演:新部公亮(日本昆虫協会)	36
「第32回世田谷の書展」 関連イベント		
1/18～1/20、1/24、1/25	鑑賞講座(5回) 講師:泉原壽蔵(日展会員)、池亀壽泉(読売書法会理事)、後藤俊秋(毎日書道展審査会員)、師田久子(日展会員)、稲村龍谷(日展会友)	360
「帰ってきた寺山修司」展 関連イベント		
3/17	映画「さらば箱舟」上映会	156

3. ライブラリー・講義室・絵本コーナー等	
施設	利用者数(人)
ライブラリー	6,851
講義室	3,364
絵本コーナー	13,471

4. 移動文学館	
内容	参加者数(人)
区内小中学校、区民センターほか	展示 2,0118(23力所)
区内小中学校他	ワークショップ 565(2校)

5. 文学資料収集・保管	
内容	
2012年4月～2013年3月の新規寄贈点数	801点
特別観覧件数	238点

6. 芸術アワード	
募集部門	応募点数
小説	7
童話	1

実施日	内容	参加者数(人)
6/1	「歯固めの日に親子でチューインガムをつくらう」 講師:ロッテ中央研究所研究員	43
7/21～9/17	ジュニア堂書店「大人たちに捧げる、夏休みの課題図書」 「夏休みーこどもたんけんシート」	1,165
8/9	子どものための読み聞かせ 「お話の森」 出演:小林顕作(俳優・脚本家・演出家)	165
8/23	子ども文学さんぽ① 「せたがやフシギはっけんシリーズ 等々力溪谷・昔話さんぽ」	6
8/25	子ども向けワークショップ 「ものがたりとの出会いかた」 出演:ブックピックオーケストラ(代表:川上洋平)	27
9/15	子ども文学さんぽ② 「子ども百名山シリーズー 御岳山」	9
10/6	子ども文学さんぽ③ 「川と文学シリーズー 奥多摩をたずねて・奥多摩溪谷さんぽ」	11
10/6～12/2	「どくとるマンボウ昆虫展」(1階文学サロン)	3,546
10/20	ことのははくぶつかん① ことばのことば①「ことば遊びをとおして、楽しく詩を書こう!」 講師:石津ちひろ(詩人)	21
11/4	移動文学館 子ども×創造体験プロジェクト 「読書と星のワークショップ」 講師:梨屋アリエ(作家)	21
11/11	ことのははくぶつかん② ことばとくさ「師匠の手ほどきをうけて、落語家になりきろう!」 講師:林家さく唐(落語家)	21
11/24	子ども文学さんぽ④ 「子ども百名山シリーズー 多摩よこやまの道」	7
12/9、12/15、12/16	ことのははくぶつかん③ ことばとびゅうつ「大きな美術作品をつくらう!」 講師:こべんなな(アーティスト)	62
2/2～3/31	「中高生のための帰ってきた寺山修司展」(1階文学サロンほか)	3,796
2/11	子ども文学さんぽ⑤ 「せたがやフシギはっけんシリーズー 喜多見・昔話さんぽ」	11
2/16	ことのははくぶつかん④ ことばとからだ「お話や詩のことばを、からだで表現しよう!」 講師:もび(西井た紀子主宰・もちはこびパフォーマンスグループ)	18
2/23	ことのははくぶつかん⑤ ことばのことば②「ことば遊びをとおして、楽しく短歌をつくらう!」 講師:天野慶(歌人)	17
3/2	子ども文学さんぽ⑥ 「やってみたい+たんけんしたいを かたちによろ!」 「テラヤマロン」でオリエンテーリングだ!」	19

2-2. イベント:子ども文学館

実施日	内容	参加者数(人)
3/16	「はじめての短歌・はじめての百人一首」 講師:天野慶(歌人)	10
2-3. イベント:講演会等		
実施日	内容	参加者数(人)
6/16	ことばの魔術師ー井上ひさしウィーク① 「井上ひさしー自立と共生の街・ポロニーヤに恋して」 講師:横山眞理子(映像プロデューサー、作家)	153
6/17	ことばの魔術師ー井上ひさしウィーク② 「井上ひさしー小説の書き手として、読み手として」 講師:阿刀田高(作家)	74
6/23	ことばの魔術師ー井上ひさしウィーク③ 「『数原検校』ーことばが踊りだすもの」 講師:小田島雄志(英文学、演劇評論家)	134
6/24	ことばの魔術師ー井上ひさしウィーク④ 「井上ひさしー稽古場から劇場へ」 講師:鶴山仁(演出家)	108
6/30	ことばの魔術師ー井上ひさしウィーク⑤ 「遅筆堂への七本の道」 講師:小森陽一(東京大学教授、文芸評論家)	148
7/14	第10回 大藪春彦記念ミステリー講演会 講師:西村京太郎(作家) 聞き手:津田令子(トラベルキャスター)	139
11/3	世田谷アートプライム in 文学館	600
2-4. イベント:他団体との共催事業等		
実施日	内容	参加者数(人)
4/21	子ども読書の日記念事業 「石津ちひろさん講演会」 共催:世田谷教育委員会	83
6/13	芦花小学校2年「まちたんけん」 芦花小学校3年「まち危険度マップ」 共催:芦花小学校	56
8月、9月	中学生職場体験 共催:世田谷区教育委員会	59
8/21～8/26	博物館学芸員実習	7
11/17、11/18	多摩美術大学との共同研究 「清水邦夫の劇世界を探る」第2弾	160
通年	文学館友の会との共催 文学講座、文学散歩など32回実施	1,172
通年	文学活動を中心とする区内活動団体の講座等を支援し、区民の生涯学習の要望に応えた。区民講座、シニアスクール等への企画展に関するレクチャーなどを、延べ20団体に実施した。	1,142

7. 刊行物			
タイトル	判型/頁数	頒価(円)	
世田谷文学館ニュース			
第51号4月 館長の作家対談:坂上弘/当館収蔵品のご紹介:大藪春彦関連資料	A4/8	無料	
第52号8月 館長の作家対談:井上ユリ/当館収蔵品のご紹介:北杜夫『榆家の人びと』創作ノート(北杜夫氏寄贈資料より)	A4/12	無料	
第53号12月 館長の作家対談:加賀乙彦/当館収蔵品のご紹介:寺山修司草稿(無題)図録等	A4/8	無料	
「地上最大の手塚治虫」展	A5/120	1,200	
「齋藤茂吉と『榆家の人びと』展」	A5/116	1,200	
「帰ってきた寺山修司」展	A5/144	1,200	

8. 年間総利用者数	
※一部イベント参加者は含まず	
	129,753人



「齋藤茂吉と『榆家の人びと』展」



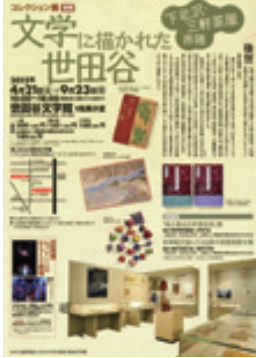
「宮崎駿が選んだ50冊の直筆推薦文」展



「地上最大の手塚治虫」展



コレクション展後期
「文学に描かれた世田谷 世田谷の詩歌と山本健吉」



コレクション展前期
「文学に描かれた世田谷 下北沢・三軒茶屋界隈」



「第32回 世田谷の書展」



「帰ってきた寺山修司」展



「清水邦夫の劇世界を探る」第2弾 (多摩美術大学との共同研究)



第10回 大藪春彦記念ミステリー講演会
「西村京太郎講演会」



連続講座「ことばの魔術師 井上ひさし」

2012年度、企画展は、「地上最大の手塚治虫」展、「宮崎駿が選んだ50冊の直筆推薦文展」、「齋藤茂吉と『榆家の人びと』展」、「第32回 世田谷の書展」、「帰ってきた寺山修司」展を開催。

春の「地上最大の手塚治虫」展は、手塚マンガをスタンダード文学として読み直すというコンセプトで開催。「手塚が託したメセージを次の世代に伝えたい」という明確な意図を持った企画展」などの意見が寄せられた。夏の「宮崎駿が選んだ50冊の直筆推薦文展」は、幅広い層に支持されるアニメーション監督宮崎駿による直筆推薦文に基づいて構成し、「宮崎監督の導きによって、本の楽しさを知ることができた」など、読書離れが言われる小中学生から好評だった。大人からも、もう一度読み直したい、子どもたちに薦める本が見つかったなど、来館者に人生を豊かにする一冊に出会ってほしいという展覧会の企画に適った反響が多かった。

秋の「齋藤茂吉と『榆家の人びと』展」は、世田谷とゆかりの深い歌人・齋藤茂吉と作家・北杜夫親子の作品世界を豊富な資料により紹介した。これまでに寄贈を受けた貴重な文学資料と、所蔵者各位の協力によって展示が可能となった重要な資料で構成し、高い評価を得た。

冬の「帰ってきた寺山修司」展は、新発見資料を中心に寺山修司の10代の詩、短歌、俳句に焦点をあて

た。寺山没後30年を機に、青森県三沢市寺山修司記念館との共催により開催した本展は、解説パネルに子ども用解説パネルを並置し、若い世代の来館者の強い共感を得る企画展となった。

「第32回 世田谷の書展」は、区内在住の流派を超えた著名書家により「世田谷ゆかりの作家たち」をテーマに開催した。書の見どころをわかりやすく解説する、出品書家による鑑賞講座は、毎年の好評を受けて、回数を増やして行った。

また、本年度より収蔵品の積極的な公開をめざして「常設展」から「コレクション展」に改称した。前期は「文学に描かれた世田谷ー下北沢・三軒茶屋界隈」、後期は「文学に描かれた世田谷ー世田谷の詩歌と山本健吉」を開催。カタログを作って欲しい、など高く評価する声が多かった。

教育普及事業は、子どもを対象とした「せたがや子ども文学館」、一般区民を対象とした連続講座等の事

業、教育委員会との共催事業、市民活動支援事業、収蔵資料の活用を促進するライブラリー運営などを実施。子どもを対象とした事業では、今年も近隣の世田谷区立芦花小学校や粕谷区民センターとの協働で出張展示とワークショップを実施。区立芦花中学校でも寺山修司展に合わせて、寺山の言葉をバナーに仕立てた「ことば展」を展示。一般対象では、菅野館長が企画構成をする連続講座の第3回目として「ことばの魔術師 井上ひさし」を開催し、講演録が刊行された(4頁参照)。

利用者総数は、展覧会観覧者数や普及事業での参加者数の増加により、前年を上回ることができた。また、ホームページのリニューアルにより、普及事業の詳細な活動報告など館の事業実績をより豊富に発信できるとおり、当館の活動に興味を持って訪れる来館者や、展覧会以外の事業を取り上げる取材記事が大幅に増えたことも本年度特筆される点であった。



「齋藤茂吉と『樞家の人びと』展」
北杜夫追悼対談 ①(10/24)



連続講座 ことばの魔術師―井上ひさしウィーク③
第3回「『藪原検校』―ことばが掘り出すもの」(6/23)



「地上最大の手塚治虫」展関連ワークショップ
「マンガ・アシスタント体験」「ソーマトロップ体験」(5/5～7/1)

展覧会関連イベント・一般向けイベント



「帰ってきた寺山修司」展

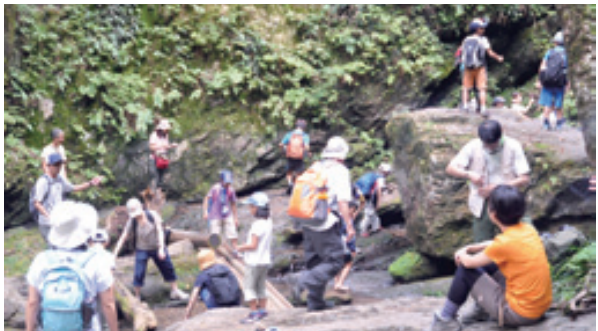


「齋藤茂吉と『樞家の人びと』展」



「地上最大の手塚治虫」展

展覧会図録



「子ども百名山シリーズ 御岳山」(9/15)

★子ども文学さんぽ



ことばとびじゅつ「大きな美術作品をつくろう!」(12/9、15、16)

★ことのはくぶつかん

こども文学館



「やってみたい+たんけんしたいを かたちにしよう!」
“テラヤマラソン”でオリエンテーリングだ!」(3/2)



ことばのことば「ことば遊びをととして、楽しく短歌をつくろう!」(2/23)



世田谷区立芦花小学校5年生のワークショップ
成果の発表「大竹さんと作る芦花百景」
世田谷区立粕谷区民センター(1/10～1/31)



梨屋アリエ氏を講師に迎えた、
「読書と星のワークショップ」
世田谷区立弦巻区民センター(11/4)



世田谷区立東深沢小学校での展示風景(6/22～7/13)

★移動文学館



世田谷区立芦花中学校での寺山こととバナー展示(1/22～2/7)



文学サロンでの寺山こととバナー展示 [「田園に死す」編](2/2～3/31)



「宮崎駿が選んだ50冊の直筆推薦文展」



「地上最大の手塚治虫」展

企画展・コレクション展 展示風景



「第32回 世田谷の書展」鑑賞講座



「帰ってきた寺山修司」展



「齋藤茂吉と『樞家の人びと』展」



コレクション展後期「文学に描かれた世田谷 世田谷の詩歌と山本健吉」



コレクション展前期「文学に描かれた世田谷 下北沢・三軒茶屋界隈」

企画展



没後80年
宮沢賢治・詩と絵の宇宙
—雨ニモマケズの心—

2013年7月13日(土)
～9月16日(月・祝)

2階展示室

観覧料:
一般800(640)円
高校・大学生600(480)円
65歳以上・障害者400(320)円
小学・中学生無料
*()内は20名以上の団体割引

資料提供: 林風舎

幸田文 展

2013年10月5日(土)
～12月8日(日)

2階展示室

観覧料:
一般700(560)円
高校・大学生500(400)円
65歳以上・障害者350(280)円
小学・中学生250(200)円
*()内は20名以上の団体割引

撮影: 片岡露満



企画展	没後80年 宮沢賢治・詩と絵の宇宙 —雨ニモマケズの心— ～9月16日(月・祝)	幸田文 展 10月5日(土)～12月8日(日)	
8月	9月	10月	11月
コレクション展	文学に描かれた世田谷—成城・多摩川界限— ～9月23日(月・祝)	旅についての断章 10月5日(土)～2014年4月6日(日)予定	
ロビー展示	ジュブナイルSFの世界 7月13日(土)～9月23日(月・祝) ジュニア堂書店 大人たちに捧げる、夏休みの課題図書 8月1日(木)～9月1日(日)		

コレクション展

前期

「文学に描かれた世田谷
—成城・多摩川界限—」

9月23日(月・祝)まで

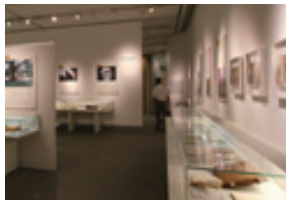
後期

「旅についての断章」

10月5日(土)～2014年4月6日(日)予定

1階展示室

観覧料: 一般200(160)円 / 高校・大学生150(120)円 /
65歳以上・障害者100(80)円 / 小学・中学生100(80)円
* 中学生以下は土・祝・日及び9/23まで無料
*()内は20名以上の団体料金



1階ロビー展示

2014年度夏「日本SF展」(仮題)
プレ企画

ジュブナイルSFの世界

2013年7月13日(土)
～9月23日(月・祝)



星新一
『プラコの
むこうで』
新潮文庫

ジュニア堂書店
大人たちに捧げる、
夏休みの課題図書

2013年8月1日(木)
～9月1日(日)



せたがや文化財団の催し物

- 世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]
- 榮久庵憲司とGKの世界—鳳が翔く
7月6日(土)～9月1日(日)



しょうゆ卓上びん 1961年

- アンリ・ルソーから始まる
素朴派とアウトサイダーズの世界
9月14日(土)～11月10日(日)



アンリ・ルソー《サン・ニコラ河岸から見たシテ島》
1887-88年

ミュージアム コレクション

- 柚木沙弥郎 いのちの旗じるし
～8月18日(日)
- 気になる、こんどの収蔵品
8月29日(木)～2014年1月13日(月・祝)

■ 世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

[Tel. 03-5450-9581]

- 向井潤吉と四季 秋
8月10日(土)～12月1日(日)

■ 世田谷美術館分館

清川泰次記念ギャラリー

[Tel. 03-3416-1202]

- 清川泰次の世界 II
帰国、そして再びアメリカへ
8月10日(土)～12月1日(日)

■ 世田谷美術館分館

宮本三郎記念美術館

[Tel. 03-5483-3836]

- Home, Sweet Home
宮本三郎の家族像
8月10日(土)～11月4日(月・休)

■ 世田谷文化生活情報センター

世田谷パブリックシアター

[Tel. 03-5432-1526]

- ジャンヌ・ヌーベル賞作家が暴く
聖女ジャンヌ・ダルクの真実—

作: バーナード・ショー

翻訳: 中川龍一、

小田島雄志

演出: 鶴山仁

出演: 笹本玲奈、

今井朋彦、伊礼彼方、

大沢健、浅野雅博、

馬場徹、村井國夫 他

9月5日(木)～24日(火)

世田谷パブリック

シアター

デュエル

～チェロとピアノのゆかいな決闘～

出演: DUEL / ローラン・シラード(チェロ)、

ポール・スタイク(ピアノ)

10月19日(土)～20日(日)

世田谷パブリックシアター

■ 世田谷文化生活情報センター

生活工房 [Tel. 03-5432-1543]

● JAPONDER 10

留学生ってどんな

勉強しているの?

9月7日(土)

～10月6日(日)

生活工房ギャラリー

● 世田谷アートフリマ

Vol. 20

9月21日(土)・22日(日)

生活工房3～5階

■ 世田谷文化生活情報センター

音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

- 中川賢一現代音楽レクチャーコンサート Vol. 2

現代音楽の迷宮へようこそ。

9月18日(水) 19時開演

中川賢一(ピアニスト/演奏とお話)

サロン・テッセラ(三軒茶屋駅徒歩3分)

● せたがやの演奏家 Vol. 9

白崎彩子 JAZZ ピアノリオ

—“Some Other Time” in 成城—

10月5日(土)

18時開演

成城ホール

白崎彩子(ピアノ)

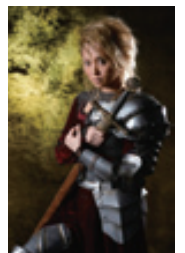
中村健吾(ベース)

ジーン・ジャクソン

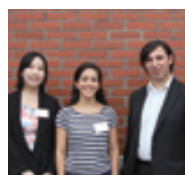
(ドラムス)



白崎彩子



撮影: 細野晋司



JAPONDER 10に
参加する留学生

休館日:

毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌日休館)

開館時間:

10時～18時
(ただし展覧会入場は
17時30分まで)

交通案内

京王線「芦花公園」駅
南口より徒歩5分
小田急線「千歳船橋」駅
より京王バス(千歳鳥山
駅行)利用「芦花恒春園」
下車徒歩5分



公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南鳥山1-10-10

Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120

ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>